
鏡の国のカンタレラ

篠月いろり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の国のカンタレラ

【Nコード】

N0457V

【作者名】

篠月いろり

【あらすじ】

ある日、中学三年生になったばかりの少年のもとに「鏡の国」からやってきたという妙な女がやって来る。

突然見知らぬ女がやって来て混乱している少年に、追い打ちをかけるように「今から殺すわよ」となるとも軽い口調で殺すという宣言してきたのだ。

ブローグがある黒いフクロウの疑問（前書き）

初めてなので読みにくい場面が多々あると思います。
なので温かい目で見てもらえると・・・。

プロローグある黒いフクロウの疑問

カチリ、カチリ・・・

「過去の自分をこれ程憎んだことは無いわ・・・」

そう言いながら何の感情も出さない女は時計を一瞥し、ため息をつく。

「まさかつまらないオチが待ってないわよねえ」

女が言う「つまらない」の意味を知る者はいないであろう。

「ま、その方が楽だけれどね。」

「しょうがない、言って確認しましょうか」

何処へ行くこうとしているのか。

何せこの部屋にはおとぎ話に出てくるような大きな鏡と古く埃のかぶった本棚、そして茶色い歪な形をした時計しかなく、ドアがなければ窓もない。

普通の人間ならば出ようにも出られない状況なのだ。

「ああ、それにしても面倒だわ」

何の感情も出さなかった顔がやっと少しだけ感情を出した。

だが、その感情の名は「嫌悪」だ。

二回目のため息をつき、女は鏡の前に移動したが、何か悩むように

首を傾げて呟く。

「久しぶりに行くから合言葉をお忘れちゃったみたいね。何だったかしら・・・？」

女は妙なことを言った。

鏡の前で女の言う、合言葉と言えば何処かに行けるというおかしなことを実現しようと言うのだろうか。

信じられない・・・が、この密閉された部屋に女がいる時点でもうおかしなことが実現している。

信じざるを得ない状況だ。

そう言えばこの女は何処から入ってきたのだろうか？

この部屋にすでに入っている私が言えたことじゃないが。

「そつだ、思いだしたわ。」

「。」

この部屋から人間はいなくなった。

(ある黒いフクロウの疑問)

プロローグがある黒いフクロウの疑問（後書き）

この雰囲気はプロローグ以外では基本的にない・・・と思います。
というか正直この雰囲気にしようと思うとかなり気力使ってます。
・・・ほん。

なので次の次くらいからは段々ギャグが混じってくるかと・・・。

第一話・・・嫌いなものは嫌い

ざわざわと賑やかな我が学校「立導中学校」の門を潜る。

「うわー・・・人に酔いそうだな、これ。」

俺は基本的に賑やかで人の多い場所が嫌いだ。

けれど今この賑やかな人混みの中に入らないと時間に遅れてしまう。少し深呼吸をしてから人混みの中に入る。予想通り気分が悪くなってきたが、今引き返すと時間がないのでそのまま突き進む。

さつきから時間を気にしているが、決してせっかちな性格な訳ではない。ちゃんと訳がある。

今俺が人混みの中に入ったのはクラス替え表を見るため。これで大体訳の内容が予想できただろう。

そう、今日は始業式。そしてそれに遅れたくない俺は嫌いな場所へ気分が悪くなりながらも入って行ったという訳だ。

「成宮涼太は・・・っと、あつた。5組か。」

1組から探していたため少々手間取ったが時間内に見付けられたのでよしとする。

もうクラス替え表を見る理由が無くなった俺は、この人混みの中から出ようと視線を少し下にずらすと、見たくも無かった名前を見付けてしまった。

「また同じクラスかよ・・・」

「どういう意味よお、涼太君酷い!!」

「おわつ、急に近付くなよ楓！」

見たくなかった名前とは「仁科 楓」と言う名だ。

此処で間違ってはいけないのが楓の性別。口調と名前だけで判断を付けてはいけない。

楓は真正正銘の男だ。

だが、オカマでは無い。オカマというと違う部分が出てくる。

オカマとは男性同性愛者や異性装をする男性、あるいは女性のように装う男性を指すが、此奴の場合は口調と名前は女のようにだが、性格や服などは男そのもの。別に男が好きな訳でもない。なんとも難しい奴だ。

難しい奴だが幼なじみだし別に嫌いな訳ではない。けれど毎回毎回同じクラスなのだ。一度も離れたことがない。ここまで来るとうんざりしてきてしまう。

「んな事どうでも良いから行くぞ。」

「・・・本当に優等生よねえ。面倒な事嫌いなくせに。」

「後で面倒だろ。内申点下げられるのも受験で面倒だし。今の面倒より未来の面倒の方が嫌いなんだよ。」

そんな面倒事が嫌いな俺はこの日を境に今までで一番面倒な出来事に巻き込まれるのだ。

(嫌いなものは嫌い)

第一話・・・嫌いなものは嫌い（後書き）

意外と楓ちゃんが好きです。

・・・キヤラ濃いなあ、と自分でも思います。

よし、やっとギャグに入って・・・いけたらいいです。

第二話・・・不死鳥にでもなったのか

「じゃ、今から殺すわよ」

「はあ？」

こんな危ない状況になったのは数分前。

たかが数分で見知らぬ女に殺されるようなことはしていないはずだ。

「じゃあ、涼太くん変な人についていつちゃ駄目よ！ちゃんと真っ直ぐ家に帰るのよ！」

「・・・はいはい。」

とかいう変な会話をして別れる。

いつもそうなのだが、楓は帰りの別れ道のとくに小さな子供に言い聞かせるように注意をしてくる。

勿論反論をしたいのだが反論すると長くなるので反論せずに終わらす。

いつもならさっきの注意のことなどを別れた後に心の中で文句を言いまくっているのだが、今日は目標が達成できたて気分が良いので心の中の楓への文句はやめておこう。

目標とは、とりあえず楓以外の奴と仲良くなって虐めを受けるのを防ごうというものだ。

最後の中学校生活で虐めを受けるなんてたまったものじゃない。

ああ、やっと家が見えてきた。
と、思ったなら何故か家に誰かいるじゃないか。
何かようでもあるのだろうか。

「あの、何か用ですか？」

「・・・成瀬涼太よね？」

俺に用があるのか？

ただ俺はこんな人に会ったことがない。

「、そうですね・・・。」

そう言った途端に見知らぬ女の口角が上がり、物凄く怪しい笑みを作る。

正直に言うとは気が悪い。この女が美形だから余計にその気味の悪さが見える。

しかも目が笑っていない、少しして俺のことを驚いたように見えた。

「まだ間に合うわよね・・・。」

「じゃ、今から殺すわよ。」

「はあ？、っつ」

反射的に出てしまった言葉を気にいらなくても言うように女は何処から取り出してきた鎌で俺の胴体を真っ二つに切ってきた・・・ん？

切ってきた？

ならばなんで俺はこんなに余裕を持って考え事ができているのだろう。

普通は痛みで気絶して死ぬか、出血多量で死ぬ。運良く気絶しなかった場合でも混乱などで考え事なんてしている余裕はないだろう。

「俺・・・不死身か？」

「チツ・・・遅かったか」

なんなんだ。この女。

人を勝手に切って何文句言ってやがる。

というか文句を言うのはこっちの方だ。

(不死鳥にでもなったのか)

第二話・・・不死鳥にでもなったのか（後書き）

お久しぶりです。

結構前に書いていたんですが投降が遅くて・・・。

次回からは頑張ります！

第三話・・・それってまさか。

「・・・とりあえずアンタ誰だよ」

「あー面倒臭い。久々に人を殺せると思ったのにい！」

「てめっ、話聞けや！」

というよりこの女は何を物騒なことを言ってるんだ。
そして誰なんだ。

「は？何て。」

「だから誰だよ、お前」

「あれ、覚えてない？咲坂一恵。小さい頃に楓君私と君で一回だけ遊んだでしょう。」

一緒に・・・？

ほとんど無い記憶を必死で思い出す。

・・・、

「ああ！いた。何か鏡の国から来たとか言っつて、変な飲み物を飲まされた記憶がある。」

「お、良い所に気が付いたわ。貴方が死なない理由はそこにある。

面倒だけど説明するわ。」

俺が一番気になる「不死身(?)」のことについて説明をすると言われたので、しょうがなく黙る。

けれど大人しく説明を聞いているとおかしな所がいくつあった。
まず、一恵の説明をまとめると、

一恵は5歳ん時に初めて鏡の国からこの世界に来たらしい。

さっきの「久々に人を殺せると思ったのにい！」という言葉で分かるだろうが、一恵は人を殺すの趣味らしい。非常に迷惑な趣味だ。その趣味は5歳の時かららしく、この世界に来たのもそれが目的だったようだ。

一恵は今の小さな体じゃ鎌などで人を殺すのは無理があるから、ある毒薬を持って来たらしい。

その毒薬がまた変なもので、ほとんどの人間は一秒で死ぬが、ある人間は死なずに体の中に眠っているその人間の優れた部分を無理矢理目覚めさせられるらしい。

(それってまさか。)

第三話・・・それってまさか。(後書き)

・・・あああああああ！

もう本当更新速度が遅すぎてびっくりないろりです！

もう本当、一ヶ月に一回くらい投稿になると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0457v/>

鏡の国のカンタレラ

2011年10月28日17時26分発行